

岸本英夫の「死後世界観」

——宇宙生命への溶入——

中村 みどり

〈論文要旨〉 宗教学者岸本英夫は、五十一歳のときに癌になり余命半年との宣告を受けたが、そのときは手術を受けて、健康を回復することができた。ところが癌を忘れかけた頃に癌の再発を知り、十年に渡って死と向き合うことになった。岸本は、発病前から死後の世界も靈魂の永存も信じていないと明言していたが、死に直面したときには、「死後の生命の存続という信念」こそが、死の問題に対するもつとも有力な武器であると思い知ることになった。このように、発病当初は死を恐れ、「生命飢餓状態」に陥っていた岸本だったが、晩年には、「死の恐怖の影が心から消えた」、「命ある限りしなければならぬ自分の仕事を考えて明るい希望にあふれている」とまで言うようになっていく。この心境の変化は、何によってもたらされたのか。本稿は、岸本の心境の変化に着目しながら、岸本が最終的にたどりついた「死後世界観」について考察しようとするものである。

〈キーワード〉 岸本英夫、成瀬仁蔵、生死観、死後世界観、宇宙生命

一 宇宙生命

1 癌の宣告

一九五四年九月、スタンフォード大学の客員教授としてアメリカに滞在していた五十一歳のときに、宗教学者岸本英夫は、癌で余命半年との宣告を受けた。このとき、岸本は、人間の生命への執着の強さを知ったという。岸本は、生存の見通しが絶望的になったときの精神状態を生理的な飢餓状態にたとえて、「生命飢餓状態」とよんだが、

その苦しみは想像以上に凄まじいものだった。なぜなら、死の問題に対する「もっとも有力な武器である死後の生命の存続という信念」⁽¹⁾（「わが生死観——生命飢餓状態に身をおいて」一九六三年一月）をもっていないかったため、素手で死の前に立つように感じていたからである。岸本は、もし死後の世界を信じることができれば、どうしても楽だろうと思っていたし、それが存在するなら地獄であつてもよいとさえ思っていたが、岸本の知性は、どうしても靈魂や他界の存在を認めることができなかった。死の恐怖がどれほど大きなものであつても、自分の生命は死とともに蠟燭の火が消えるように消えてしまうという考え方には、何の変化もなかったという。

けれども、そこに何らかの希望があつたわけではない。それは絶望以外のなものでもなく、根本的な解決らしいものは、どこにも見出すことができなかった。「わずかに慰めらしい影がさしたとすれば、それは、死後の世界からではなく、この地上の世界の中に見出された。自分の死後、家族や知友が、自分のことを想い出してくれるだろうと考えることは、非常な慰めになった」⁽²⁾（「アメリカで癌と闘う記」一九五五年一〇月）と述べている。岸本は、このとき自分の死に真剣に向き合ったが、幸いにも手術が成功して、徐々に健康を回復することができた。ところが、一九五九年一月、癌への恐れを忘れていた頃にその再発を知り、その後も手術を繰り返し続けた。発病時から一九六四年一月に永眠するまで足掛け十年、岸本は永きに渡って癌と、そして死の恐怖と闘うことになった。

2 「宇宙の霊」とは何か

実在するのはこの世だけであり、死後の世界も靈魂の永存も認めない、それが岸本の主張だった。しかし、死後「この自分」はどうなるのかという問いに対しては、「宇宙の霊にかえる」などと答えていたため、「宇宙の霊」という言葉は靈魂を表すものであり、岸本の言葉には矛盾が出てくると指摘する研究者もいた。次に岸本が、死後に

「この自分」がどうなると考えていたのか、それについて述べた言葉を紹介する。

それまで、死と無といっしょに考えていた時には、自分が死んで意識がなくなれば、この世界もなくなってしまうような錯覚から、どうしても脱することが、できなかった。しかし、死とは、この世に別れを告げる時と考える場合には、もちろん、この世は存在する。すでに別れを告げた自分が、宇宙の霊にかえって、永遠の休息に入るだけである。私にとっては、少なくとも、この考え方が、死に対する、大きな転機になっている。⁽³⁾

〔別れるとき——死に出逢う心構え〕一九六一年七月

私にとっては、私の個人の生命力というものは、私の死後は、大きな宇宙の生命力の中に、とけ込んでしまつてゆく⁽⁴⁾と考えるぐらいが、せい一杯であります。それは、いいかえれば、私という個人は、死とともになくなる、ということであり⁽⁴⁾ます。

〔私の心の宗教〕一九六二年七月

このような岸本の言葉に対し、たとえば窪寺俊之は、これらの言葉によつて岸本が自らの霊の存在を認め、「岸本自身の生命が永遠に継続することを願望したことを暴露している」⁽⁵⁾といった。また、近藤勝彦は、「宇宙靈魂」「宇宙生命」などの表象にはアニミズムの響きが感じられるといい、「既成の宗教に生きることのできなかった日本⁽⁶⁾の知識人が、自家製の宗教的世界観の表象に到達したということであろう。壮絶な死との内的戦いであつたが、結論的には、意外に素朴な疑似宗教の中に安心を求めたと言わざるを得ないであろう」と批判した。さらに宮家準は、「宇宙の霊」という言葉で表されたものは他界の一種であり、「実体があるのは唯この世の生だけだと強く確信していた」合理主義者の岸本が、「死の怖れがもたらした信念のぐらつき」のなかで、宇宙の霊に帰って休息するという独自の他界観を案出⁽⁷⁾したと指摘し、「このことは死に直面した人間にとって他界の存在を信じる⁽⁸⁾ことがいか

に大きな安らぎを与えるかということを示しているとも思える」といった。そして、「他界におもむいた死者の霊は、そこにあっても常に自分がこの世に残して別れてきた妻子の生活を心配していると考えられる」と述べている。⁽⁷⁾

また、岸本の直弟子である脇本平也も、「宇宙の『霊』という言い方も、靈魂觀をしりぞけた科学者岸本の語としては気にかかる。宇宙の霊とは何か、説明はないので不審は残る。他のところでは、『私の死後は、大きな宇宙の生命力の中に、とけ込んでしまつてゆく』という言い方も出てくる。これによって見ると、宇宙の霊とは生命力の根源のようなもののイメージなのであろうか。とすれば、いわゆる個人の靈魂の否定と、必ずしも矛盾するとはいえないかもしれない。刀折れ矢尽きて岸本も靈魂を認めた、ということではないようである」と、岸本が用いた言葉の意味を測りかねていることを示した。

岸本が批判されたのは、死の恐怖に負けて、まさしく「刀折れ矢尽きて」自らの靈魂の永存を認めたと理解されたためである。そして、そのような批判を受ける原因は、岸本自身にあった。たしかに岸本は死を恐れていたし、宮家が指摘したように「死に直面した人間にとって他界の存在を信じるのがいかに大きな安らぎを与えるかということ」を認め、それを信じられるものなら信じたいと繰り返し語っていた。その上、「宇宙生命への溶入」によって生命飢餓状態を克服することはできないと述べることも多かった。たとえば、「死についての想い——死の準備として何をなすべきであるか」(一九六〇年六月)でも、ある医学者の「自分の死後、自分の生命は宇宙に還ると考えている」という言葉が、「わたしの心に気持よく響いた。私にとつても、その辺が、考え得る限界である」といいながら、すぐ後に「しかし、このような考え方をすることは、いかにそれが納得のしやすい説明であっても、

それは、すこしも、死に対する悩みや恐れ⁽⁹⁾の解決にはならない」と続けている。このような岸本の言葉をどのよう⁽⁹⁾に解釈すればよいのか。岸本自身による説明はない。

結局、岸本は、批判されたように死への怖れに負けて、死後も靈魂は永存し「この自分」という意識を保つことができる⁽⁹⁾と信じることによって、生命飢餓感を満たしたのだろうか。それとも、癌との闘いの果てに別の道が開けてきたのだろうか。

3 「知」と「信」との間の距離

岸本は、発病の六年前に「生死観の類型——生死観四態⁽¹⁰⁾」（一九四八年七月）という論文を発表していて、そこで生死観を四つに分類している。一、肉体的生命の存続を希求するもの。二、死後における生命の永存を信ずるもの。三、自己の生命を、それに代る限りなき生命に托するもの。四、現実の生活の中に永遠の生命を感得するもの。この四つである。そして、この論文の最後で、現代社会はウィリアム・ジェームズがいうような「健やかなる心」の持ち主をつくる傾向にあるため、「第一、第二の類型の生死観よりは、第三、第四のそれが、次第に優位を占めるであろう。もとより、社会の変化は遅い。その道は遠い。しかし、生死の問題の変化の方向は、それと定まって動かぬようである」と述べた。

当時の岸本が、第三・第四類型の生死観を自らの生死観としていたことは明らかであり、社会全体としてもその方向に進むものと確信していた。ところが、自分自身が癌を発病したとき、岸本が執着したのは、「この自分」であった。そのときに初めて、岸本は、人間の生命への執着の強さを知ったといえる。そして第一・第二の生死観、とりわけ死後の生命を信じる第二の生死観こそが、生死の問題の「有力な武器」であることを思い知らされた。第

二類型の生死観を信じたいのに自らの知性がそれを許さない。さらに、観念的に把握していた第三・第四の生死観は思っていたほどの力にはならないことに気付き、どこに救いを見出せばよいのかわからなくなった岸本は、精神的に追い詰められたと考えられる。知性が認めた「宇宙生命への溶入」に、岸本は、何らかの救いを見出せたのだろうか。

脇本は、岸本が戦後まもなくから日本自由宗教連盟の理事長を務めていたことを指摘し、この連盟に参加した宗教者のなかには、大宇宙生命への帰一を説く論客もあつたとして、岸本と共に日本自由宗教連盟を創設した今岡信一良を紹介している。そして、宇宙に遍満する生命エネルギーという仮説は、宗教の近代化を進めようとするグループにはよく見られる主張であると述べた。さらに、岸本が初めて宇宙生命という言葉を使ったのは、癌発病後ではなく、「生死観の類型——生死観四態」にも既にその言葉はあることも指摘している。第二類型の最後に、「あるものは個的な靈魂の存在に納得し得ず、宇宙に遍満する大生命の存在を信ずる。死によって個我を脱した場合に、自己の生命は普遍的な宇宙生命の中に溶け込んでいく」という表現がある。このことから、死後に「宇宙生命」に溶入するという生死観は、死の恐怖によって急遽作られたものではないことがわかる。脇本は、発病前のこの言葉と、先に挙げた「私の心の宗教」(一九六二年七月)の一節を比較し、その間に十四年という歳月と癌という死病の体験があつたことを明らかにした上で、前者を宗教的宇宙生命観の客観的紹介、後者をその主体的受容であると評した。そして、両者の間に存在する質的間隔は、知と信との間の距離ではないかと問うている。また、普遍的宇宙生命への溶入という見方も、死後世界観の類型の一つとして数えるべきだと主張した。⁽¹¹⁾

はたして、宗教的宇宙生命についての「知」は「信」になったのだろうか。次に、岸本が死に向き合っていた

過程を、心境の変化に注目しながら追い、「宇宙生命への溶入」という言葉がもつ意味について考えていきたい。

二 死をみつめる心

1 死をみつめる心

発病当初は生命飢餓状態に陥り、死への怖れを表現していた岸本であったが、皮膚癌であったため仕事には支障がなく、働くことはやめなかった。その間に、心に少しずつ新しい境地がひらけてきたという。一九六二年六月九日に毎日新聞に掲載された「死をみつめる心——ガンと闘って八年間⁽¹²⁾」という文章では、心の変化を、四つの段階に分けて自ら分析している。

第一の段階では、癌という心のショックに耐えて、自分を精神的に支えてゆくために手負いのイノシシのようにガムシヤラに働いた。しかし、死の暗闇は、考えまいとすればするほど、大きな口を開いて迫ってきた。

そのうちにふと第二の段階が開けてきた。死を真正面からジッと見つめることができるようになってきたのである。なぜなら、死を「別れのとき」と考えることができるようになったからである。人間は平生の生活の中でも、小さな別れのときの悲しさ、辛さをたびたび経験している。死は、別れのときの一種であり、その最大なるものである。しかし、人間は、この大きな別れのときに対しては心の準備をしようとせず、そのために死に臨んで死ぬに死ねない苦しみが起こっているのである。死から強いて目をそむけるのではなく、日々の生活の中で小さな死の別れをくり返して、心の準備をしておくことが大切であることに気付くと、死を思うことが、それ以前ほど、耐え難いおののきではなくなってきた。

第三に開けてきたのは、死が迫ってきてても、自分の社会に対する役割と責任とを最後まで放棄しないという気持ちである。意識のなくなる最後の一瞬まで、人間生活に徹して生きる。自分の方から病気に負けて、社会に対する責任を捨てない限り、その役割から来る責任感は、迫ってくる死に対して、自分を支える大きな力となる。

第四には、このように死から強いて目をそらさないでもよいという状態になると「よく生きる」ということの意味がおのずから変化してきた。必ずしも、ガムシャラに働くことばかりが、よく生きることではないと考えられるようになった。もっと静かに、人生を深く味わうことのできるゆとりがでてきた。死の恐怖に直面しながら、静かに人生を味わう。これが、ようやく少しずつ心に開けてきはじめた第四の段階の心境である。

2 二つの契機

このように岸本は、死に対する見方を徐々に変えていったのだが、変化の契機が二つあった。一つは、日本女子大学の創始者である成瀬仁蔵の告別講演「我が継承者に告ぐ」⁽¹³⁾を読んだことであつた。成瀬仁蔵は、一九一九年三月四日に亡くなっているが、その約一ヶ月前、同年一月二十九日に告別講演を行っている。岸本は、その記念日である一九六〇年一月二十九日に、成瀬仁蔵を偲ぶための講演をするようにとの依頼を、日本女子大学から受けたのである。その準備のために成瀬仁蔵の告別講演集を読み、死は生命との「別れるとき」であると考えようになったという。

死を「別れるとき」と見るようになってからは、死も、長い一生の間に経験した様々な別れの一つであると考えられるようになった。それは全体的な別れではあるが、そのつもりで準備をすれば耐えられないものではない。この「心の準備」ということに気づくと、ずいぶん心が落ちついてきた。死は絶対的な他者ではなく、むしろ、親し

みやすいもの、それと出逢いうるものになってきたという。

また、自らが心血を注いできた仕事、成瀬にとってそれは女子教育であり日本女子大学そのものであるが、その仕事によって成瀬自身が救われたのだと、岸本は分析している。岸本は、「成瀬先生ご自身すら、日本人のため人類のために率先し、犠牲になっていると思われるであろうこの仕事が、自分の生命のこれほどの大きな支えになるとは、それまで思われなかったことであろう」といい、癌にかかり死に直面して、成瀬自身がそのことを再発見したに違いないと、推測する。永遠性をもった対象に自己の生命を託すという生死観は、発病前の岸本の生死観であった。また、岸本は「成瀬先生の告別講演を読んで、私は、成瀬先生は人間の本当の幸福をめざす仕事のために、身を捧げ尽したかた、その捧げ尽したことにより自分の永遠の生命を見出したかた、またそれが先生の生涯であり、それが先生の宗教観であったと思う」と述べているが、人間の本当の幸福をめざす仕事のために身を捧げ尽くそうという思いは、そのまま岸本の思いでもあり、それを成瀬のうちに見出して、最期までどう生きればよいのか心が定まったのだろう。成瀬の思想に触れ、成瀬という実在の、しかも実父岸本能武太とも岳父姉崎正治とも親交が深く身近な存在であった人物に、自らの理想を見出したことがきっかけとなり、ガムシヤラに働くことで死の恐怖に耐えていた第一の段階から、第二、第三の段階への移行が可能になった。

二つ目の契機は、世界有数の黒色腫の権威であるハーバード大学のフィツパトリック博士に、癌は確かに悪性の黒色腫でありこれからも何度も出てくるだろうが、それを早めに切り取っていけば長く生きられると告げられたことである。一九六一年一月にこの診断を受け、岸本は家族にあてて「I can live long」の国際電報を打った。ここで第四の段階の心境が開けてきた。そして、翌年の一月、再び岸本はフィツパトリック博士の診断を仰いだ。そ

のとき博士の口から出た最初の言葉は“*You are really a lucky man*”であった。再度、癌は治らないが、この癌では容易に死なないと伝えられた。このときが一つの転機であったと岸本自身が朝日新聞に掲載された「命ある限り豊かに——ガンでも死なない」⁽¹⁶⁾（一九六三年二月）で述べている。そのときから自分の癌について忘れがちになった。それまでは、癌に負けてはならないと考えて激しく活動していたが、博士の言葉が転機となって、癌の病状はそのままでありながら死の恐怖の影が心から消え、平常心をとり戻すことができたという。そして、手術を繰り返しながらも癌を恐れなくなり、命ある限りしなければならぬ自分の仕事を考えて明るい希望にあふれているとまでいうようになった。

3 心境の変化

岸本は、死を「別れるとき」と見るようになってから、癌に対する恐怖よりも癌への感謝の言葉を口にするようになった。たとえば、「別れるとき——死に出逢う心構え」（一九六一年七月）では、「私のこの生き方の、一ばん奥には、癌という筋が一本通っていて、そのために、ほんとうによく人生を送ってゆくことができる。癌のおかげで、ほんとうの生活ができるのだという感じがするのである」⁽¹⁷⁾といい、「癌の再発と闘いつつ生きる」（一九六二年三月）には「私の癌は、私に、人生を深く見る目と、ほんとうによく生きる生き方とを教えてくれた。私は癌をおそれながら、しかし同時に、癌に感謝するような気持ちで日々を暮している」⁽¹⁸⁾と書いている。「死をみつめる心——ガンと闘って八年間」（一九六二年六月）では、死の問題を解決してはいないと述べた後に、「しかし、それにしても、もしガンがなかったら、私はこの八年間、こんなに真剣な、深い生活をするとはなかったであろう。ガンのおかげで、私という人間には何か一本の筋が通ったような気がする。ガンに苦しみながら、そのガンに感謝するような

気持で生きているというのが、現在の私のいつわらざる心境である⁽¹⁹⁾と語った。また、死を「別れるとき」と見るようになってからは、生きているどの一日も同じように尊いと実感できるようになったと述べている。

そして、フィツパトリック博士の診断を受けてからは、人生を深く静かに味わうことができるようになったという。また、仕事に打ち込み自分を捧げ尽くしたときに、最も幸福であったと繰り返し述べた。たとえば、「私の心の宗教」(一九六二年七月)では、「自分の命のすべてをあげて、捧げつくし得たときに、人間は、もともと強い生き甲斐を感じて、本当に幸福なのだということであります。考えてみますと、ここに、人間生活の、不思議なからくりがあるようであります。自分にとって、もっとも大切なものは、命なのでありますが、その大切な命を棄てることができるようになったその時に、私は、自分の命の、もっとも強い生き甲斐を感じ、私は、もっとも幸福である、ということであります⁽²⁰⁾」と述べている。そして亡くなる二ヶ月前に発表された「わが生死観——生命飢餓状態に身をおいて」(一九六三年一月)では、「このようにして、死の暗闇の前に素手で立っていた私は、このギリギリの限界状況まできて、逆に、大きな転回をして、生命の絶対的な肯定論者になった。死を前にして大いに生きるということが、私の新しい出発になった⁽²¹⁾」と、その心境を表現した。

三 生命力が還るところ

宇宙の「霊」という言葉は、靈魂を指すものであると考えられ、そのために岸本の言葉には矛盾があると指摘された。しかし、岸本が使う「霊」という言葉は、個人的意識の存続を前提とする従来の「靈魂」とは別のものである。まず、岸本自身の言葉を、その根拠として挙げたい。たとえば、「近代人は宗教をどう考えるか」(一九五二年八

月)では、「死によって、かような肉体的要素をすべて失ってしまった靈魂は、たとい靈魂として存在するとしても果して理想世界において、見たり、聞いたり、考えたりすることができるとか。純粹な生命そのものの存続は、これを否定する理由はないとしても、伝統的に考えられてきたような死後の生命や、個人的靈魂の存続とは、たいへんに意味が異なってくるのである⁽²²⁾」と述べている。たしかに、岸本は「靈魂」という言葉を使っているが、それは個人としての意識をもたず考えることもない、「純粹な生命そのもの」としての「靈魂」であって、従来の靈魂とは異なるものである。また、脇本が指摘しているように、「宇宙の靈にかえる」という言葉は、「宇宙の生命力の中に、とけ込んでしまつてゆく」、「宇宙に還る」という言葉と同じ意味をもつものとして使われているという事実も、一つの根拠となる。

岸本は、死後には個人の生命から「この自分」という意識を抜き取った「純粹な意味での生命力」だけが存続すると考えていた。次に、それを示す文章を紹介したい。

純粹な意味での生命力の存続ということは、これを否定する理由はないであろう。しかし、従来考えられてきたような靈魂の不滅は無条件では考えられなくなっている。近代の生理学や心理学の発達に基いて考えてみると、人間が生前に獲得した個人的な意識経験というものを、死による肉体の喪失の後にまで存続し続けるということは考えられないのである。⁽²³⁾

(「これからの私達の宗教」一九五二年一月)

死後、個人の生命は大きな宇宙的なエネルギーの中に溶け込んでゆくと考えることは、現代でも、通用しそうである。もとより、これだけでは、死に直面してたぎりたつ人間の心を満足させることはできない。当人にとつて死んで消えてはならないのは各自の自我意識だからである。しかし、これも部分的な解決にはなる。⁽²⁴⁾

〔死の問題に解決はあるか〕一九五六年三月

「宇宙の霊にかえる」とは、死後に「この自分」という意識を失った「純粋な意味での生命力」が「大きな宇宙的なエネルギー」に溶け込むことである。

四 成瀬仁蔵の生死観

1 死の問題の解決方法

岸本は、癌を発病し、死の宣告を受ける前は、「死の問題の解決方法」を知っていた。少なくとも、知っていると思っていた。たとえば、「近代人は宗教をどう考えるか」(一九五一年八月)では、永遠なる理想こそ神であるとい、「心に宿る理想の光は、神の恵みである。死後の生命の存続の問題にも心をわずらわされなくなる。現在の刹那刹那の生命に永遠なるものを感得し得るからである」⁽²⁵⁾と述べている。また、「近代的宗教の特質」(一九五三年三月)では、近代的宗教の特質の一つとして、死の問題よりも生の問題を重要視するようになりつつあると指摘し、「死の問題の解決が、生の問題の解決の鍵となるのではなく、生の問題が先行することになった。真に生きがいのある生き方を見出せば、それによつて、おのずから死の問題の解決もなされる、という考え方に移ってきた」⁽²⁶⁾と述べ、「真に生きがいのある生き方」によつて死の問題を解決し得るとの見解を示していた。

ところが、死の宣告を受けた直後の岸本は、死の問題に対する「有力な武器」を、「死後の生命の存続という信念」にしか見出すことができなかった。そして、死の前に素手で立っているように感じ、生命飢餓状態に陥って苦しんだのである。「現在の刹那刹那の生命に永遠なるものを感得」することも、「真に生きがいのある生き方」をす

ることも、死の問題を本当に解決するものだと、当時の岸本には思えなかった。死から目をそらすために、ただガムシヤラに働くということだけが、岸本にできることだった。

しかし、成瀬の思想に触れ、死を生命との「別れるとき」と考えるようになって、落ち着きを取り戻すことができた。そのとき岸本が見出したのは、死ではなく、「生命」であった。つまり、「この自分」という意識は死によって失われるものと覚悟した上で、残された自分自身の生命、自分の死後もこの世に残る生命に、輝きを見出すことができるようになったのである。岸本は、「死についての想い——死の準備として何をなすべきであるか」(一九六〇年六月)に、「私は、自分自身が、そう長生きすることができるとは思っていない。しかし、私には、残されていく人生を、ほんとうに、打ち込んで生きてゆきたいと思う。それ以外には、私にとって、問題解決の有効な方法は考えられない。この人生をほんとうに、よく、深く生きてゆくことに私としての解決がある。私にとって、生の問題の解決も、死の問題の解決も、その中に含まれているように思われる」⁽²⁷⁾と書いている。ここで重要なのは、発病当初素手で死に向かい合っているといっていた岸本が、少なくとも「問題解決の有効な方法」を手に入れたといえるようになったことである。そして、それは発病以前に「死の問題の解決方法」として自ら認めていたものであった。それを、癌との闘いを通して再発見したといえよう。

成瀬の思想に触れたことが契機となって岸本は変わったのだが、それはどうしてなのか。岸本は、成瀬の思想に、そして生き方に、何を見出したのだろうか。

2 成瀬仁蔵の生死観

先述したように、記念講演を行った時点では、岸本は、成瀬が「自分の永遠の生命は、仕事によっていつまでも

続く」というところに希望を見出し、それによって救われていたと考えた。しかし、成瀬の告別講演である「我が継承者に告ぐ」からそのような成瀬の希望を読み取ることはできない。成瀬自身は、若い時から畳の上では死なぬ覚悟であり、死は自分にとって日常生活の一部であるから一向に気にかかることはない、述べている。すなわち成瀬が気にかけているのは日本の教育を改善することであって、自分自身のことではなかった。実際に、成瀬は自分の体の異変に気づいていたが、その年は大学制度や女子教育改善案が審議される年であり、「仮令この身を犠牲に供しても、私の最上を尽し、御国の為に努力を捧ぐべき唯一の機会であると確信」した成瀬は、仕事が続けられなくなることを恐れて、医者診断を仰ぐとはしなかった。それ以前も、成瀬は私生活を犠牲にして女子教育に打ち込んでおり、自らの死を前にして、死後に残る自分の仕事に救いを見出して死の恐怖に耐えていたとは、考え難い。

成瀬は、自分自身の個人的な生命よりも「永遠の生命」が重要であるという強い信念を抱いていた。成瀬は、生命は滅びないという。告別講演で、「実は我々は斯うして居る瞬間々々死んでいるが、又同時に生きて居るのであります。即ち生があるから死があり、死があるから生があるのであります。(中略)実に生死の音律は毎日の生活の音律となつて流れて居るのであります。此の肉体の死はたゞこの波動の中の少し大きい波であるといふだけで何の違ひもないのであります」と述べ、肉体は自分の「本当の身体」ではなく、本当の身体というのは「この中にある霊体である」といった。「即ち私の肉体は茲に朽ちるが私が六十年かゝつて畢生の努力を以て築き上げた私の霊体即ち私の品格は、霊の宮は永久に亡びない」といい、われわれの生命には死滅ということはない、消滅ということはないと確信していた。しかし、霊魂が天国に入るといふ希望をもっていたわけではない。「死の問題」⁽²⁸⁾と題した

文章にも、「我々の云ふ永遠不滅の生命は迷信時代に考へた地獄、極楽でも、天国でもない。もう少し確実な実在である」と述べている。

では、「永遠の生命」とは何なのか。「死の問題」からみていきたい。成瀬は、私たちの意識は太陽の光をプリズムが分解して赤緑紫のさまざまに分けたようなものだという説を引用し、「我々の生命も今一つの色を表はして居るが、我々が実体に帰れば、他の多くのものと調和合体して一つになるのである。我々は七色の光線が合して白色になつたからとてその光の実体が無くなつたとは云はない」と述べた。分かれても合しても依然として光は光であり、たとえば我々の小人格が肉体と共に消えることがあっても、「大人格Ⅱ人道Ⅱ真如Ⅱ神に其の価値は歸して、決して消滅するものではない。なほその考へが明瞭となるために、無限の生命は無限の意志であると云う事を申し置いて置きたい」という。無限の生命は、無限の意志であり、「時と空間を超越した無始無終の永遠無窮たる生命の価値」である。

成瀬は、人間にできることは、宇宙という実在の一つの波として自分自身の個人的生命を全うし、使命を果たして、もとの命に帰るといふことだと考えていた。自分自身の人生の全ては、もとの命に帰するのであつて、何も失われるわけではないという信念をもっていたために、成瀬は死を恐れないといった。たとえば、「死の問題」の最後で「人の人たる道に這入つて、生涯の実を結んだ人は、安き眠りに就くべきが当然である。今苔深き墓下に遺骸を埋めても其の人格、其の精神は吾人の間に存在するものである。即ち人は此の世に來りて使命を完うして、もとの命に歸つたのである。夫が吾人の死の問題であると思ふ」と述べている。使命を果たした人の人格、精神は私たちの間に存在する。それは、すなわち「もとの命」に帰るといふことを意味する。これが成瀬の生死観であり、信

仰であつた。

五 宇宙生命への溶入

1 自我の構造

岸本は、癌の告知から一年半後、一九五六年三月に発表した論文「死・人間・文化」で、人間の自我の真のあり方が明らかになったときに、はじめて死の問題の解決が可能になると書いている。⁽²⁹⁾そして、死の四ヶ月前、一九六三年九月に発表した論文「宗教的人生観」で、再び、自我のあり方に言及している。次に、その一部を引用する。

“自分”は、生れてきてから社会生活の間に築きあげたものである。したがって“自分”の中には、社会全部が入っている。母親のお守り、隣人の親切などすべて入っている。全部が自我である。自我が複合体であることを見逃して、自分の欲求がはつきりしていると考えるところに間違いがある。“自我は一つの小宇宙である”と今日の心理学では教える。ということは、価値判断の最後の基準は個人だということは今日十分筋の通っていることであるが、その価値判断の内容に、他人に対する思いやりもはいつていることになる。それを別にした自我はない。⁽³⁰⁾

自分の中には、社会全部が入っている。他者の愛情や親切が入っており、その全てが自我であると、岸本はいう。つまり、自我には、他者の思いが溶け込んでいるということである。では、私たちが他者に示した愛情や親切は、どうなるのか。「他者」の「愛情・親切」が「私」の一部となっているということは、「私」の「愛情・親切」も「他者」の一部となるということを含意している。

岸本は、「私の心の宗教」（一九六二年七月）で、近代的な産業形態のもとでは分業が進み、貨幣価値に換算されるためにだけ人間の働きがあるかのように錯覚しがちであるが、実はそうではなく、人間の仕事には、必ずもつとまなましい人間的な意味があると述べている。たとえば靴をつくって売る靴屋の場合、利益だけを計算して靴を売るのならそれは命を打ち込んでゆく仕事にはならないが、もしその靴を買ってはく人の幸福を心の中に描きながら一生懸命につくって売るのなら、それは他の人々の幸福を高める立派な仕事になるという。そして、「人間にとつては、きわめて身近にある自分の仕事の中に、意味を発見して、それに打ち込んでゆくことに、人生の本当の幸福がある、ということであります。死に直面しながら、死後の生命というものをたよりにしない私にとっての、人間の問題の解決の鍵は、このようなところにあるのであります。これが、私の宗教であり、これが、私が、毎日、生きてゆく⁽³¹⁾としていく気持であります」と述べた。岸本の自我論からいえば、仕事に込められた思い、他者の幸福を願う心は、「他者」の一部となる。それが、仕事がもつまなましい人間的意味なのではないか。

仕事によって人は人につながる。そこには無限の連鎖がある。この無限の連鎖の一点として、他者の幸福のために生命を捧げ尽くして働くことに、岸本は深い幸福を感じ、そこに自分自身の「人間の問題の解決の鍵」と「宗教」を見出したと考えられる。

2 宇宙生命への溶入

脇本は、「宇宙生命への溶入」も「死後世界観」の一つであり、十四年の歳月を経て、岸本のそれについての「知」は「信」に変わったのではないかと述べた。しかし、岸本自身には、その自覚はなかった。たとえば、先に挙げた「宗教的人生観」でも、火葬が仏教と結びついた風習であることを指摘し、「焼かれて大自然に帰ってゆき、

生命も宇宙の大生命の中に溶け込んでゆくと考えている。近代的な考えをもった人の中にも、こう考えている人が多い」と書いたすぐその後に、「しかしその場合も、どうしても残しておきたいのは、自分自身の個人の意識であって、大自然に入り自分の意識がなくなるとするといっても立ってもいられない⁽³²⁾」と続けており、「宇宙生命への溶入」に希望をもっていたとは考えられない。岸本は、それを知識人として「知」っていただけであり、「信」ずることはできなかったようだ。では、どうして脇本には、「知」が「信」に変わったように思えたのか。たとえば岸本が自覚していなかったとしても、岸本の近くで癌との闘いを見守り、その変化を目の当たりにした脇本は、そこに岸本の「信」を見出していたということである。

実際に、岸本が、死の問題を解決するための「有効な方法」であると実感していたのは、「宇宙生命に溶入」するということではなく、「この人生をほんとうに、よく、深く生きてゆくということ」であった。それは、特別なことではなく、身近な仕事に意味を発見して打ち込んでゆくことであり、誰にでもできることだ。ただし、利己的な目的のために打ち込むのではなく、「自分のことではないことのために自分の身も心も捧げ尽くすこと」にこそ、人生の深い歓びがあるという。岸本は、この二つを関連付けることはなかったが、このように生きようとするのと、「宇宙生命に溶入」することは別のことではないと考える。

「死・人間・文化」(一九五六年三月)で、岸本は、生涯の努力を打ち込んだ仕事をもつ人は、「社会的自我」の一部をこの世に残すことができるといった。そして、愛する妻子は当人にとって「物質的自我」の一部であると述べている。発病当初、岸本が「自我の一部」としてこの世に残ると考えた仕事は、「業績」といえるようなものであったと考えられる。たとえば、成瀬の場合日本女子大学そのものがそれであるという。けれども、晩年の岸本がい

う身近な仕事は、名を残すようなものではない。先に挙げた町の靴屋の例でいうならば、靴屋が、使う人の幸福を思いながら心をこめて靴を作ったとしても、靴そのものは数年使われた後に捨てられるものである。農業を営む人が、食べる人の健康と幸福を祈りながら米を作ったとしても、それはすぐに消費されるものであり、形あるものは残らない。しかし、たとえ形あるものが残らなくても、他者の幸福のために打ち込む仕事こそが、全ての人間の幸福を含む「人間の、ほんとうの幸福」⁽³³⁾につながる仕事であると、晩年の岸本は考えていた。仕事にこめられた「他者の幸福を思う心」が重要なのだ。

誠実な仕事を通して、他者の幸福を願う「心」が、他者の一部となる。「他者の幸福を願う心」は「生命力」をもち、この世に影響を与え続ける。それは抽象的なことではない。たとえば、小さな親切が人の心に届くとき、それは次の「小さな親切」を生む「原動力」となる。人の思いは「生命力」をもち、その「力」は人を介して伝わっていく。個人が他者に示した「愛情・親切」が、「他者」に溶入し、その一部となるならば、日々「私」は「他者」に、「他者」は「私」に溶入しているということになる。それは、「宇宙生命」に溶入することにはならないだろうか。

岸本は、実体があるのはこの世の生命だけだと断言していた。「宇宙生命」とは、時空を超えて存在するこの世の生命の総称である。それは「永遠の生命」であり、生命の「大いなるつながり」である。岸本は、私たち一人一人は、「大いなるつながりの一点」であり、この一点は、「極微ながら、全体の連鎖を構成する、欠くべからざる一点」であると考えていた。そして、「この一点を無視して、全体は成立しない。この関係に心打たれて、小さな自分も、全体を支える支柱の一本であることを感ずる場合に、自己の生命と無限につながる生命との間には、一脈の

相通うものができてくる⁽³⁴⁾という。私たち一人一人が「宇宙生命」の「一点」である。そう考えると、個人の「生命力」が「他者」に溶け込むことは、「宇宙生命に溶入」することとして理解することができる。すなわち、私たちは、仕事を通して、生きることを通して、日々「宇宙生命に溶入」していることになる。そして、「宇宙生命に溶入」した「生命力」は、私たちの肉体の死後も他者の中で生き続けるのである。

六 愛の力

1 愛の力

晩年の岸本は、宗教学者として死の問題を客観的に分析するのではなく、自分自身の心境を率直に吐露することが多かった。観念的な生死観と生命飢餓状態に陥ったときの生死観とは、別個のものになったというほど異なると述べており、健康なところに書いた生死観に言及して死の問題を分析するようなこともしていない。発病当初と晩年の岸本を比較した場合、明らかに違っているのは、個性をもった「この自分」に対する態度である。発病当初、岸本は「この自分」に執着していたが、晩年の岸本は、自分を他者のために「捨てる」ことにこそ幸福を見出していた。もともと深い幸福は、「すべて他のもののために与えてしまう。すべて捧げ尽す生活の中にある⁽³⁵⁾」ということ。ここに大きな転換がある。

岸本は、一九六二年一月に発表した「自由宗教とは何か⁽³⁶⁾」で、生死の問題の解決方法を三つ挙げている。第一は、「激しく、本当に生きるということ」、第二は「死後の生活は考えないこと」である。そして第三は「無我の愛に思い到ること」であった。この「無我の愛」こそ、岸本が最後にたどりついた心境だったと考える。

成瀬は、先に挙げた「死の問題」で、キリスト教が「欧州列国の人心を収め、終に世界の全面に其の感化を及ぼし」、仏教が「東洋を支配し、我が日本にも入り来り、千何百年間人心を維持した」のは、「クライスト、釈尊が社会の為め、人の為め、身を犠牲にせられた愛の力」によるものだと言った。そして、「愛は愛を生み、愛は愛を合せて、宇宙の精神を生ずる。これが宇宙の完全を実現する原動力となるのである。我々は完き愛を求めて、自分とは、自分と社会と、自分と神とが一つに融合して、その間に自他の差別のないやうにならねばならぬ、この域に達すれば死は死でない」と続けている。キリストや釈尊は大人格を象徴するものである。成瀬によれば、私たちの小人格は、大人格に帰して消滅することがない。私たちのささやかな「愛の力」もまた、「宇宙の完全を実現する原動力」となる大人格の「愛の力」に合流すると思えられる。岸本がいう、自分を捨てることにより湧き上がる深い喜びとは、「完き愛」を求めて自らの生命を捧げ尽くした末に、「自他の差別」はないと実感したときの喜び、自分と「人、社会、神」が一つに融合する喜びであり、岸本が求め続けた「自我を超えた、大いなる何ものかを感じ得た」という心の喜び⁽³⁷⁾だったと考えられる。

岸本は、最後まで生命飢餓状態は残るといつていた。そして、「この自分」への執着を完全に断つことはできないと認めていた。しかし、たとえば自我意識が消滅しても、成瀬がいうように、自分自身の意志、自分自身の「生命の価値」の全てが、永遠の生命・大人格に帰して消滅することがないと信じていることができれば、それによって「生命」への執着は満たされる。自分を捧げ尽くして生き、死後には「愛の力」という「純粋な生命力」となって「宇宙生命」に溶入するということが、それが、岸本が十年に渡る癌との闘いを経てたどりついた、生死観であり、「死後世界観」だったのではないだろうか。

2 死後の世界

成瀬は、「人の人たる道に這入つて、生涯の実を結んだ人」は、墓下に遺骸を埋めても「其の人格、其の精神は吾人の間に存在するものである」といった。故人の人格、精神は、肉体の死後にも失われることなく存在し続ける。むしろ、一生を終えたときにこそ始まる、今ひとつの「生命」があるのではないだろうか。

「宇宙生命への溶入」というと、壮大な生命を想像するが、実際に存在するのは、私たちひとりひとりである。一人の人の生涯をかけた努力が、その人と関わった人々の心の中に残って人格の一部となり、それが後世に受け継がれていく。「宇宙生命への溶入」を、そのように理解したい。また、人生の真価は、個人に与えられる名誉や報酬ではなく、他者の心に残る「生命力」にあると考える。そして、自分の全生命を他者に捧げ尽くすことに深い幸福を感じていた岸本の「死後の世界」は、「人の心の中」であつたと考えたい。

注

- (1) 『理想』第三六六号。岸本英夫集第六卷『生と死』溪声社、一九七六年、二二三頁。岸本英夫『死を見つめる心』講談社、一九七三年、一九頁。
- (2) 『文芸春秋』第三三卷第一九号。『生と死』、一〇六頁。『死を見つめる心』、六七頁。
- (3) NHKテレビ放送、一九六一年七月一六日。『生と死』、一五一頁。『死を見つめる心』、三三頁。
- (4) NHKラジオ「人生読本」、一九六二年七月一二日・一三日・一四日。『生と死』、一七八頁。『死を見つめる心』、三八頁。
- (5) 窪寺俊之「岸本英夫の生死観について」(『神学研究』四五号、関西学院大学神学研究会、一九九八年)、二二頁。
- (6) 近藤勝彦『癒しと信仰』教文館、一九九七年、二三三―二三四頁。
- (7) 宮家準『生活のなかの宗教』NHKブックス376、日本放送出版協会、一九八〇年、一七頁。こうした宮家の解釈に、大町公は「私の心の宗教」の一節を引用しながら、岸本が「他界の存在を信じ」、そのことで「大きな安らぎ」を覚えたとは認めがたい

と反論している。大町公「岸本英夫のたたかい」(『奈良大学紀要』二二号、一九九三年)、二〇頁。

(8) 脇本平也『死の比較宗教学』岩波書店、一九九七年、三八―三九頁。

(9) 『大法輪』第二七卷第六号。『生と死』、一三二頁。

(10) 『大法輪』第二五卷第一〇号。『生と死』、二三六―二五八頁。『死を見つめる心』、九九―一一九頁。

(11) 脇本、前掲書、八七―九〇頁。

(12) 『毎日新聞』一九六二年六月九日。『生と死』、一七〇―一七三頁。

(13) 成瀬仁蔵「我が継承者に告ぐ」(『家庭週報』第五〇二号・告別講演、一九一九年一月)。『成瀬仁蔵著作集』第三卷、日本女子大学、一九八一年、九八九―九九八頁。

(14) 岸本「成瀬先生の宗教観——死の脅威にうちかつ永遠の光」(『桜楓新報』第一〇二号、一九六〇年二月、『女子大通信』第一三四号、一九六〇年三月)。『生と死』、一二四頁。

(15) 前掲論文。『生と死』、一二六頁。

(16) 『朝日新聞』一九六三年二月二〇日。『生と死』、一八八―一九二頁。『死をみつめる心』、九二―九五頁。

(17) 『生と死』、一五二頁。『死を見つめる心』、三四頁。

(18) 『婦人公論』第五四八号、一九六二年三月。『生と死』、一六九頁。『死を見つめる心』、九二頁。

(19) 『生と死』、一七三頁。

(20) 『生と死』、一八二頁。『死を見つめる心』、四二―四三頁。

(21) 『生と死』、二二七頁。『死をみつめる心』、二二頁。

(22) 『いづみ』第八号、日本女子大学通信教育部、一九五一年八月。岸本英夫集第四卷『東西の文化』溪声社、一九七五年、六一頁。

(23) NHKラジオ宗教放送、一九五二年一月四日・五日。『創造』、一九五二年四月。『生と死』、一四頁。

(24) 『毎日新聞』一九五六年三月二二日。『生と死』、二七〇頁。

(25) 『東西の文化』、六四頁。

(26) 『現代と宗教』宗教学会年報第一輯、国学院大学内宗教学会、一九五三年三月。『東西の文化』、七〇頁。

(27) 『生と死』、一三九―一四〇頁。

(28) 『成瀬仁蔵著作集』第二卷、日本女子大学、一九七六年、三五―四〇頁。

岸本英夫の「死後世界観」

- (29) 『人間の科学―第六回月報』中山書店、一九五六年三月。『生と死』、二六七頁。
- (30) 『女子大通信』第一七六号、一九六三年九月。『生と死』、二〇二頁。
- (31) 『生と死』、一八七頁。『死を見つめる心』、四七頁。
- (32) 『生と死』、一九九頁。
- (33) 『生と死』、一八四頁。『死を見つめる心』、四四頁。
- (34) 『生と死』、二五〇頁。『死を見つめる心』、一一二頁。
- (35) 『生と死』、二〇三頁。
- (36) 『創造』一九六二年一月。『生と死』、二二―二五頁。
- (37) 岸本『宗教神秘主義』大明堂、一九五八年、二〇頁。